

項目	重点目標	実績	自己評価
<p>【1】 実践的農業技術・知識の習得支援の強化</p>	<p>○より実践的な農業技術や優れた経営感覚が習得できるよう科目内容の充実を図り、学生個々の資質を高めていく。 ○進展する情報化、国際化社会の中、柔軟に対応できる能力の習得・向上のため、高度な教育や授業の充実に努める。 ○学生は就農希望の他、農業法人、農業関連企業への就職、4年制大学の編入など多様な進路を志向していることから、早期に進路を定めるよう指導する。 ○キャリア形成を意識させながら学生の志望を叶えるための学習機会の設定と志望実現のための支援の充実強化を図る。</p>	<p>○先進的な農業者の講話を聞いて就農意識を高める授業の導入や、学生が主体的に学習するための指導方法の工夫、卒業論文としてのプロジェクト研究の指導など、学習内容の充実に取り組んだ。 ○従来から実施している講義「国際農業」や「マーケティング」のほか、新たに「GAP(農業生産工程管理)」や「鳥獣害対策」の講義を実施し、農業における今日的課題解決に向け教育内容の充実を図った。 ○進路指導:計画的な面談や関係情報の提供を通して、学生自身が進路を早期に決め、目標に向けて行動を起こすよう支援した。 ○6月に本校主催で4回目となる農業法人セミナーを開催し、今までで最多の県内22法人と2学年とのマッチングの機会を設定した。参加法人のうち11社に17名が就職した。 ○1年生を対象に農業関連の農業法人、民間の農業関連企業、農業関連団体19法人を招き「農の仕事研究セミナー」を初めて開催し、進路を考えるきっかけづくりを行った。</p>	<p>○本校の教育方針と授業内容、進路支援への評価は学生・教職員ともに高い。 ○先進的な技術の取得、実践的な職業教育の視点に立ったカリキュラム見直し、教職員の資質向上や能力強化への取組に対する教職員の評価は低い。 ○学生や進路先のニーズに応じたカリキュラムの見直しを図るとともに、校内研修の充実や教育センター等での研修への積極的な参加、新たな技術、指導方法等の習得機会の強化などを通して、教職員の指導能力の強化を図っていく。 ○卒業生46名中、自営就農(4名)、雇用就農(26名)を含め、44名の進路が決定(令和2年4月1日現在)している。 ○今後も一人一人の希望が実現できるよう、よりきめ細かい指導に努めていくとともに、1年生では面談等を通じて進路相談や2年生におけるキャリア形成プログラムの充実等を図り、早期の進路決定を図っていく。</p>
	<p>学部・班ごとの目標</p>	<p>学部班ごとの実績</p>	
	<p>(1) 教務部教務班 ・学習科目の見直し等によるカリキュラムの強化 ・高度な教育や授業の充実 ・志望をかなえるための学習機会の設定と支援の強化</p>	<p>・先進的な農業経営者(6名)の講話を通して「農業＝職業＝経営」といった視点と併せ、多面的視点で農業を理解させることが出来た。 ・グループ制(3～4名)での学習スタイルを通じて座学やほ場での実習、一年間のデータ・成果をまとめた発表会等を実施、社会で即戦力につながる知識と技術・コミュニケーション能力を培うことができた。 ・大型特殊(農耕用含む)38名、大型けん引22名、全経簿記検定3級11名、危険物取扱者乙種第四類8名が合格した。フォークリフト運転技能講習、「溶接」の授業は新型コロナウイルス感染拡大に伴い2年次に延期した。 ・1年生全員が各意見発表論文賞へ応募し、入賞者は4名だった。 ・意見発表やプロジェクト発表では東日本農業大学校等プロジェクト発表・意見発表会に4名が出席し、意見発表の部で1名が全国大会に出席した。 ・1年生を対象に「GAP講座」を初めて開催。県内3校の高校生9名、高校教諭6名、農大生52名計67名が参加した。 ・農業振興課が主催する高大連携推進会議へ参加するとともに、先進事例調査(3事例)を実施した。 ・1年生を対象に農学基礎実習の授業の中で「鳥獣害対策」の授業を初めて開催。県内4校の高校生27名、高校教諭5名、農大生52名計81名が参加した。 ・農業大学校等の学生を対象にした講座「ミライの農業をつくる3DAYSインターン(農林水産省事業)」に2名が参加、自分の将来構想づくりを高めることができた。</p>	
	<p>(2) 水田経営学部 ・キャリア形成プログラム等における効果的な学習による資質の向上 ・進路に応じたキャリア形成の支援</p>	<p>・学習計画に基づき、随時関係機関等と連携しながら、講義、実習、視察等を行い、学生のキャリア形成を支援した。 ・農業法人(2社)の視察研修を実施し就職・雇用就農へ結びつけた。学部学生11名全ての進路が確定し10名が就農(雇用就農含む)している。 ・次世代農業人材投資事業(準備型)を活用した学生に対し、キャリア形成プログラムのプロジェクト研究を通じて課題解決能力が向上するよう指導し、円滑に就農できるように支援を行った。 ・1年次の早い段階から面談を行い、2年次のキャリア形成プログラムの組み立てや、卒業後の方向性について情報交換を行い、研究テーマや自分の将来について自ら検討できるように誘導した。</p>	
	<p>(3) 園芸学部 ・関連産業に寄与する効果的な学習の推進 ・進路希望に応じた適切な支援 ・総合的な販売学習の支援</p>	<p>・計画作成時から試験場研究員の助言等により、学生への丁寧な指導をした結果、研究成果データの集計、卒業論文のスムーズな取りまとめができた。 ・1年生から自主的な作物管理と当番制による農場管理を徹底した結果、基礎的かつ実践的な栽培管理技術の習得が図られた。 ・専攻ごとの先進地視察や市場見学、ぶちファームでの販売体験を通じて実践的な販売学習が図られた。さらに販売学習の場として名取市防災広場での販売会「ぶちぶちファーム」も6月～12月(月2回)開催した。 ・個別面談は2年生5回、1年生4回実施し早期から資格取得及び卒業後の進路について情報交換を行った結果、農業法人11名、農業団体2名、その他2名となった。</p>	
	<p>(4) 畜産学部 ・試験場職員との協力による知識・技術の習得支援 ・畜産関係機関、団体等との協力による実践的学習の実施 ・各種資格の取得指導、支援 ・希望進路の実現支援</p>	<p>・畜産試験場の研究員等と年度当初から学生への指導について随時情報交換を行った結果、円滑に講義や実習ができた。 ・プロジェクト研究では自主性を尊重しつつ、データ収集指導及び取りまとめ指導を行った結果、決められた時間内に結果をとりまとめ学部、校内で発表し卒業論文として完成させることができた。 ・関係機関団体との連携として年度計画を確認・調整し、実習(加工実習、削蹄、共進会等)や講義(市場、飼料工場等の見学)を円滑に進めることができた。 ・資格については、補講や農家等での実習を実施し対策を講じた結果、家畜人工授精師資格は2年生11名中8名、2級認定削蹄師は受験した9名が取得した。 ・面談を通じて進路の意向を確認、就農、就職、海外研修といった希望を叶えるため、丁寧な情報提供を行った結果、11名全ての進路が決定した。</p>	
<p>(5) アグリビジネス学部 ・関連産業に寄与する効果的な学習の推進 ・進路希望に応じた適切な支援 ・総合的な販売学習の支援</p>	<p>・関連産業に寄与する効果的な学習については現有する加工機器を活用した学習を実施することができた。 ・高度な測定機器・加工機器等を用いた学習では水産関連の試験研究機関と試作等で連携ができる環境を整えることができた。 ・就職に有利な資格取得について情報提供と受講を学生に薦めたが、多くの取得につながらなかった。 ・卒業生7名中、県内の農業法人へ4名、農業団体・企業に2名が就職した。 ・総合的な販売の場として、ぶちファームや仙台の勾当台公園で開催された収穫祭「みやぎまるごとフェスティバル」のほか、新たに12月に開催された宮城農業高校の販売会に加工品を販売することができた。</p>		

項目	重点目標	実績	自己評価
【2】 魅力ある 大学校づくりの 推進	<p>○当校の一学年の定員は55名であるが平成28～30年度は50名を切る入校者数だった。しかし平成31年度は53名、令和2年度は50名と増加している。</p> <p>○定員数の入校生を確保していくためには、学生募集活動の強化が重要であり、様々な情報発信の方法を工夫しながら、高校生や進路指導職員等に対し本校の教育内容について県内外への周知を徹底していく。</p> <p>○施設等の老朽化については、中期的な修繕計画のもと予算を確保しながら修繕や更新を実施し、学習環境や生活環境の整備に努めていく。</p> <p>○学校運営については、外部関係者の意見や評価を取り入れながら教育体制の充実を図り、魅力ある大学校づくりを推進する。</p>	<p>○寮や設備等を計画的に修繕するために必要な予算の確保に努め、老朽化している施設(視聴覚室、仮設教室)・設備(古川教場空調設備ほか)等の修繕を行った。</p> <p>○新設された保健室に平成30年度から養護職員を配置し、引き続き健康診断等を活用した学生の健康管理指導を行っている。</p> <p>○定員を確保するべく、県外の農業系高校への入試案内送付や入試のタイミングに合わせた県内高校への訪問を実施したほか、入校希望者が気軽に情報が得られるようQRコード付の入校案内パンフレットにリニューアルするなど入校者募集活動を強化した。</p> <p>○学校教育と学校生活の充実に向け、保健室の養護職員による健康管理指導やカウンセリングなど、学生への支援体制をさらに強化し、魅力ある大学校づくりに力を入れた。</p>	<p>○学生募集について、多様な広報活動(募集案内のリニューアル、学校訪問、進路ガイダンス、オープンキャンパス、楽天スタジアムでの学校PRの放映、日本農業新聞での農大生紹介等)に精力的に取り組んできた。</p> <p>○令和2年度の志願者数は56名、合格者は52名と定員には満たないものの50名を超える入校者数を確保することができた。今後も、工夫を重ねながら積極的な学生募集活動を図り、定員確保に向け努力していく。</p> <p>○学校施設については依然として学生、教職員の評価は低い。計画的な整備を実施しているものの未だ十分でない状況が続いている。計画的な整備を地道に続けていく。</p> <p>○平成30年8月から保健室に学生の健康管理に不可欠な養護職員を配置した結果、生活習慣の改善やライフプランの策定、人との付き合い方などの講義が充実し、自分の身体や人生、人間関係について考える糧となっている。</p> <p>○今後も健康診断データに基づく個別指導を実施し、学生自らの健康管理について関心を高めていく。</p>
	学部・班ごとの目標	学部班ごとの実績	
	<p>(1) 教務部学生班 ・学校施設、設備の充実</p>	<p>・施設では視聴覚室の音響設備の整備、仮設教室の改修(園芸学部)、古川教場の空調施設の改修、瑞穂寮の非常灯・照明改修などを実施できた。</p> <p>・設備の更新では、名取教場のスチームコンベクションオープン(加熱蒸気オープン)、真空包装機、小型運搬車等の導入が実現できた。</p>	
<p>(2) 教務部教務班 ・農大の情報発信と学生募集の推進 ・多彩で豊かな教育体制と充実した学校生活への支援体制の構築</p>	<p>・各入校試験前(推薦・前期・後期)に学校訪問109校を実施。今年度は県外(1都9県156校)の高校校にオープンキャンパスの案内を送付した。</p> <p>・募集案内やポスターにQRコードを配置し、当校ホームページに容易にアクセスできるように改良したことにより、アクセス数が増加した。</p> <p>・令和2年度の志願者数は56名、合格者は52名となった。</p> <p>・まるごとフェスティバルへの参加、楽天スタジアムでの学校PRの放映のほか日本農業新聞での農大生紹介、地元新聞、TV等のメディアの取材等を通じて学校のPRに努めた。</p> <p>・県内を中心とした高校33校からの要請を受け進路ガイダンスや模擬授業等に職員を派遣し、252名の生徒に対して本校のPR活動を行った。なお、新型コロナウイルス感染拡大に伴い5校22名分が中止となっている。</p> <p>・学生に対してのカウンセリングに対する理解を深めるため、今年度も県教育委員会主催のカウンセリングに関する研修に職員が参加するとともに、発達障害教育研修、生徒指導研修会などにのべ9名が参加した。</p> <p>・新たに農大に赴任した職員に対して、高校からの出向職員による職場研修(2回)を実施し学生指導の基礎を修得した。</p> <p>・保健室に定期的に養護職員が滞在することにより、学生の生活指導、健康診断書に基づ健康指導、ライフプランの策定等がなされ、健全な学生生活の一助となった。</p>		
【3】 県民の要望に 応える農業 研修システ ムの整備	<p>○県民は食の安全安心の観点や農業に対して様々な興味や関心を持っており、自らが農業生産に関わることへの要望も高まっている。</p> <p>○専門的技術や知識の習得ができる場として、平成24年度からは従前の研修体系を見直し、初歩から本格的な技術まで段階的な農業研修システムを構築した。</p> <p>○農業法人への就業や新規参入等の動向に応じて、農業機械の操作・管理に対する技能習得の要望が高まっていることから、習熟レベルに応じた農作業技術の研修や最新情報の提供を行いながら、様々な研修を効率的に実施していく。</p>	<p>○研修案内パンフレットやホームページのリニューアルにより、研修生の募集に努めた。</p> <p>○研修生の経験や知識に応じて段階的に無理なく技術が習得できるよう、細やかな指導を行った。</p> <p>○販売実習を兼ねた野菜生産販売では、目標を上回る売上げがあり、研修生の熱意が見られた。</p>	<p>○ニューファーマーズカレッジや農業機械研修は、農業生産に関わる県民及び農業法人から多くの申込みがあり、受講した研修生の満足度も高い。</p> <p>○施設・設備の老朽化や、農業機械研修のニーズの高まりに伴う担当職員の負担割合の増加など課題が多い。</p> <p>○農業生産に関わる県民や農業法人を対象とした研修は、本校の教育活動の柱の一つであり、今後も教育環境の整備や教育内容の充実を図りながら、宮城の人材育成に力を入れていく。</p>
	学部・班ごとの目標	学部班ごとの実績	
	<p>(1) 教務部研修班 ・農業者研修の情報発信と研修生確保に向けた取り組み強化 ・ニューファーマーズカレッジ研修(農業チャレンジクラス、農業マスタークラス)の充実度アップ ・ニーズに対応した農業機械研修の実施</p>	<p>・ニューファーマーズカレッジでは、ホームページでの情報発信に加え「宮城農業見聞のつどい」等各種イベント、マスメディ等を活用し広報を行った結果、農業チャレンジクラスで初級38名、中級14名、マスタークラスで11名の計63名が受講した。</p> <p>・農業チャレンジクラスは講義と実習を組み合わせ基礎力の向上に努めた。最終アンケートでの受講満足度は10点満点で初級8.9中級8.8で前年同様高い評価であった。</p> <p>・農業マスタークラスではハウスと露地での野菜の生産・出荷実習に加え、農業機械研修を行い、実践力の向上に努めた。また、就農希望者に対する就農に向けた営農計画の作成についても指導を行った。受講生の満足度は10点満点中9.1と前年同様高い評価であった。</p> <p>・ニューファーマーズカレッジの各コースの出席率は概ね8割以上で、研修生の学習意欲が高い。また、マスターコース受講者11名のうち10名が就農した。</p> <p>・農業機械研修のうち大型トラクター基礎研修では単体6回と臨時2回で54名、けん引3回と臨時2回で23名が受講した。普及指導員及びJA営農指導担当者の安全研修では計25名が受講した。</p> <p>・農業機械整備研修は9名の研修を実施した。研修トラクター及び運転コースの点検整備を継続して実施した。</p> <p>・県主催の「農業機械と農作業安全を考える研修会」にニューファーマーズカレッジ受講生、大学校学生が参加し、法改正と作業機の安全確認について学んだ。</p> <p>・一般農家向けの農業機械研修は、参加人数で多少の変更はあったが、開催状況はほぼ当初計画どおりであった。機械研修を通して機械の操作技術とともに、農作業安全を啓発した。</p>	